女子の年齢階層別による飲み物の飲用比較

A comparison of drinks consumption of women in different age groups

韓　順子、谷　伊織、早川史子
Soon-ja HAN, Iori TANI, Fumiko HAYAKAWA

キーワード：年齢階層別，茶葉，煮出し麦茶，若年層，中高年層，食文化
Key words：Different age groups; tea leaves; boiled barley tea; younger age group; Middle and older age group; food culture.

要約

2007年５月下旬から６月上旬にかけて，愛知県に居住する20～60歳の女子を対象に飲み物の飲用実態を調査した。年齢別階層を20～39歳，40～59，60歳以上の３区分とし検討した結果，以下のことが明らかとなった。

1. ３世代ともに１日を通して茶葉を使って淹れた緑茶の飲用率が高かったが，年齢が高くなるに従って多く飲まれていた。
2. 次いで飲用率の高い飲み物は麦茶であったが，世代間による差は見られなかった。
3. 牛乳は，どの世代もよく飲んでおり差がなかったが，年代が高くになるに従って，微増傾向にあった。コーヒーは40～59歳に最も多く飲まれており有意な差が見られた。
4. ペットボトル水や紅茶は若年世代に飲まれていたものの中・高年世代には，ほとんど利用されていなかった。
5. 全体を通して，若い世代ほど飲み物を飲まない傾向にあった。

以上のことから年齢が高い世代ほど緑茶の飲用率・嗜好性が高く，日常生活において日本の伝統的な食文化・食習慣が定着していることが示唆された。一方，若い世代ではペットボトル飲料の利用率が高く，飲み物の多様化が見られた。

Abstract

From the end of May through to the beginning of June 2007, I conducted a survey on the drinks consumption of women aged twenty to sixty residing in Aichi prefecture. Separating them into the age groups of 20 to 39, 40 to 59, and over 60, and then analyzing the results, the following points were observed:

1. For all three generational groups, the consumption rate of tea leaves and roasted green tea throughout one day was high, but consumption was significantly higher for those in the older age groups.
2. The drink with the next highest level of consumption was boiled barley tea, and there was no real difference between the generations.
3. For milk, there was no real comparative difference in consumption between the generations, but it was clear that the rate of consumption increased for the older generations. A significant difference could be seen for those in the 40-59 age bracket as they consumed the most coffee.
4. Water and tea in pet bottles were drunk by the younger generation, but those in the middle- and older age groups did not really utilize them.
5. Throughout the whole survey, as the generations got younger and younger, the trend pointed to the consumption of fewer drinks.

From the above it can be seen that the older generations prefer green tea and that Japan's traditional food culture and eating habits are still well established. However, for the younger generation the use of pet bottles was high and the diversity of their drinks was apparent.

1. 緒言

日常の飲み物として知られている「茶」は，「日常茶飯事」という言葉が示すように，私たちの食生活になくてはならない飲料である。しかし，近年ペットボトルやコンビニエンスストア，自動販売機の普及・拡大に伴って急須を使って茶を飲むという昔からの伝統的な飲用習慣が失われつつある。長年に亘って当たり前のように継承されてきた飲食習慣が，社会生活の変化や加齢とともにどのように推移していくのか，その実態を把握することは，健康・栄養教育を行なう上で重要な知見となる。

愛知県の女子高校生と女子大学生の飲み物の飲用状況について検討した調査[1]では，両者間に飲み物の種類や嗜好，来客時及び団欒時の飲み物に差が認められたことや日本一の茶産地として知られる静岡県の女子学生は他の地域（阪神地区・滋賀県・鹿児島県）に比べて緑茶を多く飲んでいる[2]ことが報告されている。また年齢が高くなるにつれて緑茶の飲用率が高くなることが明らかにされている[3]。愛知県西尾市は碾茶の生産量では全国第２位[4] [5]のシェアを誇る茶産地として全国的に知られているが，同じ茶産地を有する他の地域と同様の飲用傾向が見られるので

あろうか。

そこで、本論文では調査対象を拡大し，愛知県における女子社会人の日常の飲み物の飲用実態を明らかにし，世代別によって飲み物がどのように異なるのか，また若者から高齢者まで幅広い年齢層で常用されてきた日本の伝統的な飲料である緑茶を中心に今後，喫茶習慣がどのように移り変わっていくのかを検討した。

2. 調査方法

(1) 調査対象および調査方法

愛知県を主な生育地とし、現在も県内に居住する 20～60 歳代の女子社会人 427 名を対象とした。自記入方式によるアンケート用紙は，県内の男女共同参画センター，講演会の参加者および学生の家族に依頼し，前者は即日回収，後者は後日回収した。

(2) 調査時期

2007年 5 月下旬～6 月上旬

(3) 調査内容

飲用機会別(朝食時，朝昼間，昼食時，昼夕間，夕食時、就寝前)に調査日の前日に飲んだ飲み物 20 種類（何も飲まない，水道水，ペットボトルの水，湯、急須で淹れた茶，ペットボトルの茶，茶葉でいれた紅茶・ティーバックの紅茶，ペットボトルの紅茶，ウーロン茶，煮出し麦茶，ペットボトルの麦茶，玄米茶，ドリップ・サイフォンコーヒー，インスタント・缶コーヒー，牛乳，ジュース，炭酸飲料，乳酸飲料，健康飲料，その他）の中から複数回答させた。飲み物の嗜好性や来客時および団欒時の飲み物については，4 種類（緑茶，紅茶，コーヒー，その他）の中から一つ選択してもらった。また飲み物の嗜好理由とペットボトルを利用する理由についても回答してもらった。

尚，本論ではペットボトルの水をペットボトル水，急須でいれた茶（茶葉を用いて急須で淹れたお茶）を茶，ペットボトルの茶をペットボトル茶，茶葉を用いて淹れた紅茶を紅茶，ペットボトルの紅茶をペットボトル紅茶，煮出し麦茶を麦茶，ペットボトルの麦茶をペットボトル麦茶，ドリップ・サイフォンコーヒーをドリップコーヒー，インスタント・缶コーヒーをインスタントコーヒーとした。

(4) 統計および解析

回答総数 427 名のうち有効回答数は 367 名（85.9%）であった。さらに回答者の年齢階層を世代別に若年世代の 20～39 歳(101 名)，中年世代の 40～59 歳(201 名)，高年世代の 60 歳以上(65 名)に 3 区分し比較した。

統計解析は SPSS 15.0J を用い，差の検定は x^2 検定後，調整済み残差検定を行った。

3. 結果および考察

3－1　世代別による 飲み物の飲用状況

(1) 一日の飲み物の飲用比較

一日全体の飲み物の飲用状況を世代別に示した（表１）。飲用率は，全飲み物の飲用者数（何も飲まない者も含む）に対するある飲み物の飲用者数の割合を%で示した。一日を通して最も多く飲まれていた飲み物は３世代ともに急須で淹れた茶であった。特に茶は60歳以上に多く，他の世代に比べて有意に飲まれていた（$p<0.01$）。一方，ペットボトル茶は有意な差は認められなかったものの若い世代ほどよく飲んでいる傾向にあった。

表1　一日の飲み物の飲用状況(%)

	20-39歳	40-59歳	60歳以上	
無し	7.4	6.6	4.1	
水（水道）	10.2	11.0	17.7	*
水（P）	6.6	5.6	4.1	
湯	0.3	0.7	1.0	
茶（急須）	22.3	26.4	50.0	**
緑茶（P）	6.6	5.3	4.1	
紅茶（葉茶）	5.3	5.2	3.8	
紅茶（P）	1.5	0.2	0.0	*
ウーロン茶	5.9	8.2	3.6	
麦茶（煮出）	16.2	16.0	17.9	
麦茶（P）	1.3	0.5	0.5	
玄米茶	1.7	2.1	0.5	
コーヒー（D）	9.1	10.0	7.9	
コーヒー（I）	9.6	14.4	11.0	*
牛乳	9.9	10.2	10.8	
ジュース	2.3	3.2	2.6	
炭酸飲料	1.5	0.9	0.3	
乳酸飲料	1.5	1.2	1.5	
健康飲料	2.8	1.8	2.8	
その他	6.3	5.9	3.1	

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

注）(P)：ペットボトル、(D)：ドリップ、(I)：インスタント
（煮出）：茶葉を用いて煮出したもの

茶の次に多かった飲み物として20歳～39歳，60歳以上では麦茶，水道水の順であったが，40～59歳については麦茶に次いでインスタントコーヒーの飲用率が有意に高かった（20～39歳に対して$p<0.05$）。阪神地区で行った飲み物の調査[6]でも同様の傾向が見られており，40歳以上の中・高年世代に好まれている飲み物といえた。

水は中・高年層が水道水をよく飲むのに対し（それぞれの世代に対して$p<0.01$），20～39歳の若い世代はペットボトル水をよく利用する傾向にあった。若年世代にとって，水といえばミネラルウォーターであり，水道水を「水」としてそのまま飲むという習慣が無くなりつつあるように思われた。紅茶は20歳～39歳に飲まれているものの，60歳以上ではあまり飲まれていなかった。特にペットボトル紅茶の飲用率は全ての世代で低く，60歳以上では全く利用していなかった。ペットボトルの利用に関しては，麦茶の場合も同様で煮出した麦茶がよく飲まれているのに対し，ペットボトル麦茶はほとんど利用されていなかった。

牛乳は，比較的どの世代もよく飲んでおり世代間に有意差がなかったものの，世代が高くになるに従って飲用率が高くなる傾向が見られた。60歳以上に多かったのは，加齢に伴って「骨粗鬆症」などの健康への意識が増すためではないかと考えられた。反面，若年世代の牛乳離れが危

惧された。炭酸飲料は他の 2 世代に比べ 20～39 歳で飲まれていたが，飲み物全体に占める割合は 1.5%と少なかった。中・高年世代ではほとんど飲まれていなかった。その他の飲み物として回答していたのは，主にビールや黒酢，豆乳などであった。

また 1 日全体の中で飲み物を何も飲まないと回答した割合は，20～39 歳で 7.4%，40～59歳で 6.6%，60 歳以上で 4.1%と若い世代ほど水分を摂取していない傾向にあった。

(2) 飲用機会別飲用状況の比較

飲用機会別の飲用状況を表 2 に示した。

表2　世代別の飲用機会別の飲用状況（%）

	朝食時				朝昼間				昼食時			
	20-39歳	40-59歳	60歳以上		20-39歳	40-59歳	60歳以上		20-39歳	40-59歳	60歳以上	
無し	4.0	1.5	0.0		21.8	15.4	3.1	**	4.0	1.0	1.5	
水（水道）	12.9	15.9	29.2	*	4.0	10.0	12.3	*	6.9	6.5	10.8	
水（P）	5.9	4.5	1.5		5.0	6.0	6.2		4.0	2.0	3.1	
湯	0.0	2.0	1.5		0.0	0.0	0.0		0.0	0.0	1.5	
茶（急須）	15.8	26.9	60.0	**	15.8	18.4	44.6	**	37.6	42.3	70.8	**
緑茶（P）	1.0	2.0	0.0		5.9	7.0	6.2		10.9	8.5	6.2	
紅茶（葉茶）	5.9	5.0	7.7		8.9	6.0	4.6		1.0	1.5	1.5	
紅茶（P）	0.0	0.0	0.0		1.0	0.0	0.0		1.0	0.0	0.0	
ウーロン茶	5.9	5.5	4.6		4.0	8.0	6.2		6.9	10.9	1.5	*
麦茶（煮出）	10.9	13.9	15.4		16.8	11.4	20.0		14.9	18.4	18.5	
麦茶（P）	1.0	1.0	0.0		2.0	0.5	1.5		2.0	0.5	0.0	
玄米茶	2.0	2.0	0.0		1.0	2.5	0.0		2.0	2.5	1.5	
コーヒー（D）	16.8	21.9	21.5		11.9	11.4	9.2		5.9	6.5	3.1	
コーヒー（I）	18.8	27.9	23.1		8.9	15.4	20.0		8.9	10.0	7.7	
牛乳	25.7	26.9	29.2		4.0	3.5	12.3	**	7.9	6.5	6.2	
ジュース	4.0	5.5	4.6		2.0	1.5	3.1		3.0	3.5	0.0	
炭酸飲料	0.0	0.0	0.0		0.0	1.5	0.0		0.0	0.0	0.0	
乳酸飲料	1.0	2.0	6.2		0.0	1.5	0.0		0.0	0.0	0.0	
健康飲料	1.0	1.0	1.5		4.0	2.0	3.1		0.0	0.5	0.0	
その他	10.9	5.0	1.5	*	2.0	4.0	3.1		5.0	3.5	3.1	

	昼夕間				夕食時				就寝前			
	20-39歳	40-59歳	60歳以上		20-39歳	40-59歳	60歳以上		20-39歳	40-59歳	60歳以上	
無し	5.0	5.0	1.5		3.0	3.0	0.0		6.9	13.4	18.5	*
水（水道）	5.9	8.5	10.8		11.9	8.5	10.8		19.8	16.9	32.3	**
水（P）	8.9	7.0	6.2		5.0	4.0	3.1		10.9	10.4	4.6	
湯	0.0	0.0	1.5		1.0	0.0	1.5		1.0	2.0	0.0	
茶（急須）	17.8	17.0	33.8	**	34.7	40.8	70.8	**	11.9	12.9	20.0	
緑茶（P）	10.9	7.5	9.2		5.0	3.0	3.1		5.9	4.0	0.0	
紅茶（葉茶）	10.9	13.4	7.7		2.0	1.5	0.0		3.0	4.0	1.5	
紅茶（P）	5.0	1.0	0.0	*	1.0	0.0	0.0		1.0	0.5	0.0	
ウーロン茶	5.0	7.0	4.6		9.9	10.9	3.1		4.0	7.0	1.5	
麦茶（煮出）	16.8	11.4	21.5	*	20.8	24.9	23.1		16.8	15.9	9.2	
麦茶（P）	0.0	0.0	1.5		3.0	0.5	0.0	*	0.0	0.5	0.0	
玄米茶	2.0	2.5	1.5		2.0	2.0	0.0		1.0	1.0	0.0	
コーヒー（D）	9.9	14.4	12.3		3.0	3.0	1.5		6.9	3.0	0.0	*
コーヒー（I）	12.9	25.9	13.8	*	2.0	2.5	0.0		5.9	5.0	1.5	
牛乳	13.9	12.4	9.2		3.0	5.0	3.1		5.0	7.0	4.6	
ジュース	3.0	5.5	6.2		0.0	0.0	0.0		2.0	3.0	1.5	
炭酸飲料	5.9	1.5	0.0	*	1.0	0.5	0.0		2.0	2.0	1.5	
乳酸飲料	3.0	2.0	1.5		1.0	0.5	1.5		4.0	1.5	0.0	
健康飲料	4.0	3.0	6.2		3.0	0.5	1.5		5.0	4.0	4.6	
その他	4.0	4.5	4.6		5.9	13.9	1.5	**	9.9	4.5	4.6	

* p <0.05, ** p <0.01　調整済み残差検定により 多　い:　少ない:

1）朝食時の飲み物について

3 世代間において有意差が認められた飲み物は，水（$p<0.05$），茶（$p<0.01$），その他（$p<0.05$）であった。60歳以上の世代では茶の飲用率が60.0%と有意に高く（$p<0.01$），20〜39歳の飲用率は 15.8%と最も低かった。20〜39 歳が多く飲んでいたのは牛乳であった。40〜59 歳では茶，インスタントコーヒーおよび牛乳をそれぞれ 26.9%，27.9%，26.9%とほぼ同じ割合で飲用しており，朝食時に利用する飲み物の選択肢が多いことが特徴としてあげられた。

コーヒーは 20〜39 歳に比べ 40〜59 歳以上の比較的年齢の高い世代に飲まれているようであった。朝食時において，牛乳は 20〜39 歳で 25.7%，40〜59 歳で 26.9%，60 歳以上で 29.2%といずれの世代でも比較的よく飲まれていた。また茶に次ぐ飲み物として前回の調査[4]から麦茶が予測されたが，朝食時にはあまり飲まれていなかった。水道水は，他の 2 世代に比べ 60 歳以上で有意（$p<0.05$）に飲まれていた。20〜39 歳の若い世代は，水道水を飲まないかわりにペットボトル水を利用しているようだった。朝食時において，3 世代ともペットボトル飲料の利用はいずれの飲用機会に比べて低かった。

2）朝昼食間の飲み物について

朝食と昼食の間の時間帯で世代間による有意差が認められた飲み物は，水（$p<0.05$），茶（$p<0.01$），牛乳（$p<0.01$）であった。また飲み物を全く飲んでいない割合についても世代間に有意差が認められた（$p<0.01$）。20〜39 歳の若年世代は、他の世代に比べて有意（$p<0.01$）に水分を摂らない傾向にあったが，60 歳以上の世代は茶をよく飲み，麦茶やコーヒーなども合わせると何らかの飲み物をよく飲んでいることが明らかであった。60 歳以上では朝昼時のいわゆる「10 時」にも牛乳を他の世代より飲んでいた。その理由として，前述のように健康への配慮が考えられた。一方，20〜59 歳の飲用率が低いのは，この時間帯が就業時間中であるためと推察された。

3）昼食時の飲み物について

昼食時で世代間において有意差が認められた飲み物は，茶（$p<0.01$），牛乳（$p<0.01$），ウーロン茶（$p<0.05$）であった。昼食時の飲み物として最も多く飲まれていたのは急須で煎れた茶であったが,20〜39 歳で 37.6%，40〜59 歳で 42.3%，60 歳以上で 70.8%と 3 世代間においては，60 歳以上に有意に飲まれていた（$p<0.01$）。次に多かったのは麦茶で食事の際に利用する飲み物は，さっぱりした茶系飲料が好まれているようだった。麦茶は世代を問わず飲まれていたが，ペットボトルの利用は特に中・高年世代で少なかった。

ウーロン茶は 40〜59 歳の飲用率が高く，60 歳以上に対しては有意差が見られた（$p<0.05$）。また昼食時には，紅茶はほとんど利用されていなかった。炭酸飲料や乳酸飲料，健康飲料は全て

の世代において全く飲まれていなかった。

4）昼夕食間の飲み物について

昼夕食間時で世代間において有意差が認められた飲み物は，茶（$p<0.01$），紅茶（$p<0.05$），麦茶（$p<0.05$），コーヒー（$p<0.05$），炭酸飲料（$p<0.05$）であり，世代間の特徴は次のようであった。60 歳以上では茶，40〜59 歳はコーヒー，20〜39 歳では紅茶や炭酸飲料が有意に飲まれていた。反対に，飲まれていない飲み物は，60 歳以上では紅茶，40〜59 歳および 20〜39 歳ではペットボトル麦茶であった。昼夕間時は，いわば「3 時の休憩時間」に相当するもので，自分の好きな飲み物を選択して飲んでいることが考えられ，年齢層別による嗜好特性が見られた。

5）夕食時の飲み物について

夕食時で世代間において有意差が認められた飲み物は，茶（$p<0.01$），麦茶（$p<0.05$），その他（$p<0.01$）であった。どの世代も圧倒的に茶が飲まれていたが，世代が高くなるに従って飲用率が高く，特に 60 歳以上の世代で顕著だった。この傾向は朝食時と同様，20〜39 歳の若年世代において飲用率が低く茶の飲用習慣が，あまり定着していないようにも考えられたが，一日全体の飲用量で見てみると食事中には，やはり茶がよく飲まれており，食事には欠かせない飲み物であることが示唆された。次に麦茶の飲用率が高かったが，60 歳以上では，ペットボトル麦茶を全く利用していなかった。40〜59 歳では，その他の飲み物が麦茶に次いで多かったが，これは主にアルコール類であった。

6）就寝前の飲み物について

就寝前において世代間による有意差が認められた飲み物は，水（$p<0.01$），コーヒー（$p<0.05$）であった。60 歳以上では全飲み物中，水道水の飲用率が有意に高かった。20〜39 歳は，コーヒーをよく飲んでおり他の世代には見られない傾向であった。しかし愛知県における 20 歳代前半の女子大学生ではほとんど飲まれていなかった[1]ことから，社会人というライフスタイルによる影響が大きいと考えられた。60 歳以上では，就寝前にコーヒーは全く飲まれていなかった。

就寝前の特徴的な飲用状況として，飲み物を飲まない世代は 60 歳以上に最も多かったが，20〜39 歳はよく飲んでいた。就寝以外の全ての飲用機会において若年世代ほど飲用率が低いのに対し対照的な結果であった。その要因として高齢者が就寝前に意識的に水分制限をしているためであろうと推論された。

(3) 飲み物の嗜好性 およびその理由

世代別による好きな飲み物とその理由を表3，表4に示した。茶は20～39歳，60歳以上で好まれていたが，高齢者ほど茶の嗜好性が高かった。40～59歳はコーヒーを最も好きな飲み物としてあげていたが，ほぼ同じ割合で茶も好まれていた。またその理由として各年代ともに味が最も多く，次に香りを選んでいたが，若年世代では味を，中・高年世代では香りを重視している傾向が見られた。

表3　飲み物の嗜好性(%)

	20-39歳	40-59歳	60歳以上
緑茶好き	42.6	42.2	74.6
紅茶好き	21.8	13.1	6.3
コーヒー好き	34.7	44.7	19.0

p <0.01

調整済み残差検定により　多い　少ない

表4　飲み物の嗜好理由(%)

	20-39歳	40-59歳	60歳以上
香り	22.4	38.1	39.5
色	1.3	0.0	4.7
味	71.1	58.1	48.8
その他	5.3	3.9	7.0

p <0.05

調整済み残差検定により　多い　少ない

茶葉に対する消費者の意識と消費行動について東京都（国分寺市）と神奈川県（横浜市）で実施した調査[6]では，「緑茶好きの消費者」が，回答者全体の81.4%を占め年代とともに増加する傾向にあることや「緑茶嫌いの消費者」は20代に多いことが報告されている。さらに「緑茶に対する関心度」については全体の69.3%が関心を示したが，20代は関心度が低く70代以上では82.3%の者が高い関心度を持っていることが明らかにされている。

従って，本調査から得られた茶の世代別による嗜好性の違いは，これまで早川ら[2) 3)]が行なってきた研究結果と同様の傾向が見られたことからも，全国的な現象であることが推論された。

(4) 来客時および団欒時の飲み物のイメージ

それぞれの世代が来客時および団欒時の飲み物としてどのようなものをイメージするかを調べた。結果を表5，表6に示した。来客時の飲み物として20～39歳および60歳以上が有意（$p<0.01$）に茶を選んでいたのに対し，40～59歳はコーヒーと茶をほぼ同じ割合で選択していた。また団選時には来客時と同様の傾向が見られたものの，20～39歳では紅茶，40～59歳ではコーヒーに対するイメージが強く他の世代との比較において有意な差（$p<0.05$）が見られた。

表5　来客時の飲み物に対するイメージ(%)

	20-39歳	40-59歳	60歳以上
緑茶	57.0	44.3	69.2
紅茶	11.0	7.0	6.2
コーヒー	28.0	46.8	21.5
その他	4.0	2.0	3.1

p <0.01

調整済み残差検定により　多い　少ない

表6　団欒時の飲み物に対するイメージ(%)

	20-39歳	40-59歳	60歳以上
緑茶	42.3	39.9	57.8
紅茶	16.5	9.1	7.8
コーヒー	28.9	42.4	31.3
その他	12.4	8.6	3.1

p <0.05

調整済み残差検定により　多い　少ない

(5) ペットボトルの選択理由

ペットボトルを利用する理由を表7に示した。ペットボトルを利用する理由としては，3世代とも「簡便さ」を最も多くあげていたが，特に20～39歳にその傾向が強く見られた。一方「味」を重視する世代は中・高者に多かった。ペットボトル飲料としては水よりも茶が多く利用されていた。ペットボトル水は朝食時，夕食時および就寝時に多く飲まれており，主に自宅で利用されていると考えられた。これに対しペットボトル茶は，朝昼間，昼夕間等の食間時の飲用機会で飲まれている傾向にあり，外出先や勤務先等で利用する飲み物として位置づけられた。飲料をリキャップして必要な時に好きな量だけ飲めるという利便性や技術開発により元来，屋内で飲まれていた茶が屋外でも常時飲用可能となったことから，携帯できる飲料として普及したものと考えられる。ペットボトル麦茶はいずれの飲用機会においても少なかった。

表7　ペットボトルの選択理由(%)

	20-39歳	40-59歳	60歳以上
簡便さ	74.4	62.3	54.5
価格	2.6	0.0	0.0
味	12.8	23.0	36.4
その他	10.3	14.8	9.1

n.s.

4．結論

愛知県内に居住する20～60歳以上の女子社会人を3つの年齢階層別に区分し，最も食生活に密着した茶を中心に日常の飲み物の飲用状況を調査した。その結果，世代間において共通して有意差が見られた飲み物は茶であったが，それは60歳以上の世代が茶をよく飲んでいたことによるものであった。朝食，朝昼間，昼食，昼夕間，夕食，就寝前のいずれの飲用機会においても60歳以上の高年世代ほど茶をよく飲用していたが，20～39歳はあまり飲んでいなかった。しかし，好きな飲み物としてあげていたのは，3世代ともに茶だったことから，茶が日常の飲み物として食生活に定着し浸透しているものと思われた。

世代間による飲み物の嗜好調査では，60歳以上が茶，40～50歳がコーヒー，20～39歳が紅茶を有意（$p<0.01$）に好んでおり，団欒時の飲み物と合致していたが、来客時に出す飲み物とは必ずしも対応していなかった。茶に次いで飲用頻度の高かった飲み物は麦茶であったが，ペットボトル入りの飲料はほとんど飲まれていなかった。簡便性に富んだペットボトル飲料は，若者には利用されているものの愛知県の中・高年世代においては，ほとんど活用されていないことが認められた。飲料水については，若年世代はミネラルウォーターをよく利用し，中・高年世代は水道水を飲んでいることが明らかとなった。

本調査の結果から若年世代ほど，飲料の多様性が見られ，昔からの食文化である「急須を用いて茶を淹れる」という喫茶習慣が薄れつつあることが示唆された。今後，20～39歳の茶をあまり飲んでいない世代が，加齢とともに茶を飲み，伝統的な食文化の継承者となり得るのであろうか。これからの研究課題とするところである。

引用文献

1）韓　順子，谷　伊織，早川史子：女子学生（高校生と大学生）の夏季における飲み物の飲用比較，東海学園大学研究紀要，第13号，91-100（2008）

2）早川史子，大石邦枝，野呂裕子，前田昭子，南　幸，田村義保：女子学生の初夏・初冬の飲み物の飲用実態と意識,日本食生活学会誌，Vol.13-4，264-270（2003）

3）早川史子，前田昭子，岡崎章子，石津陽子，猪口智子，南　幸，中森正代，田村義保：阪神地区における女子の飲行動の年齢階層別比較，日本食生活学会誌，Vol.15-3，210-215（2004）

4）農林水産省　平成19年度作物統計調査

5）社団法人農村漁村文化協会：茶大百科Ⅰ歴史・文化／品質・機能／品種／製茶，農文協（2008）

6）岩崎邦彦：リーフ緑茶の需要創造のためのマーケティング戦略構築に関する実証研究，東京農業大学学位論文（2008）